

随筆



ヒメヤマセミ

## グジャラート生きもの紀行 その2 鳥類編

石川 照之



アオショウビン

### 1. はじめに

前号ではKYB-Conmat Pvt. Ltd.のある西インド、グジャラート州バドダラ市と周辺で見られる動物を紹介した。今回は当地で見掛けた鳥類約90種からいくつか紹介したい。その前に動物編脱稿後の出来事を2つ記しておきたい。

ひとつめは社有車で国道を走行中、道端を歩く牛の群れから、一頭が突然こちらに向かって突進して来た。急ブレーキを掛けたが間に合わずに衝突、ボンネットが大きく凹んだ。幸い運転手・私とも怪我はなく、牛もすぐに立ち上がったので大丈夫だろう。この3年間、車やバイクとの接触は何度もしたが牛とは初めて、当地ならではの出来事であった。

ふたつめはアーメダバード近郊で鳥見の最中、2m以上跳躍するという野生の猫「カラカル」を、またバドダラ近郊で「ニルガイ（ウマシカ）」を目撃した（写真1）。



写真1 カラカル（上）とニルガイ（下）

### 2. 鳥類

#### 2.1 ムネアカゴシキドリ（胸赤五色鳥）

ずんぐりむっくりの鳥で大きさはスズメくらい、

額と胸に大きな赤班がある。名前のおり賑やかな体色である。「ポッ・ポッ・ポッ・ポッ」と短い間隔で規則的に鳴く。英名のCopper-smith Barbetは、銅細工師が槌を叩く音をなぞらえたものだ。

私にはこの鳥が一番のお馴染みである。明け方、寝室のガラス戸を嘴でゴンゴン叩く。ハーフミラーのガラスに映った自分の姿を、敵と思って攻撃していたのかもしれない。ガラス戸の棧に足を掛け、こちらを覗きこむ姿はいたずらっ子の顔だが、大欠伸をすると存外怖い顔だったりする。



写真2 大欠伸するムネアカゴシキドリ



写真3 ガラスを叩くムネアカゴシキドリ

2月頃から8月頃まで、毎日のように窓辺に来て楽しませてもらったが、だんだん間遠くなってしまった。来れば「ウルサイ」「また糞をして」と言いながら、来ないと寂しいものである。

ある日曜の夕方、寝室から「ゴンッ」とひと際大

きな音がしたので見に行くと、口と肛門から赤茶色の液体を流してバルコニーに横たわっていた。口を開けて腹をひくひくさせている。ガラスに激突したように見るからに苦しそうだ（写真4）。

このまま息絶えてしまいそうな様子だったが、20分程して立ち上がり、さらに10分程して飛び立っていった。その後来ていない。元気になって生きていて欲しい。



写真4 息も絶え絶えのムネアカゴシキドリ

10月末の朝、気温が下がり空は青く気持ちよい。「ヒック・ヒック・ヒック・ヒック」としゃっくりを繰り返すような声がする。頭上の電線に留まって一生懸命に鳴いている。

まだ若鳥でうまく鳴けないようだ。バルコニーで気絶していた彼があいさつに来てくれたのだと嬉しいのだが。

## 2.2 ギンバシ（銀嘴）

この鳥は階下の同僚宅のバルコニー生まれである。彼の部屋のバルコニーは日除けネットが張っており、弛んだところに巣が掛けられ雛が孵ったのだ。兄弟で一階上の我が家を訪ねてくれた。地味な姿だけれど可愛らしい。



写真5 ガラス戸の棧に留まるギンバシの兄弟

## 2.3 シリアカヒヨドリ（尻赤鶇）

街中といい郊外、野原といいよく見かける鳥である。頭は黒色で冠羽が頭巾のようだ。名前の由来は下尾筒が赤いからである。日本のヒヨドリは「ピー

ヨ・ピーヨ」と陽気で賑やかだが、こちらは明け方「ピッキヨロ・ピッキヨロ」と可愛い鳴声で朝を知らせてくれる。



写真6 夫婦仲が良いシリアカヒヨドリ

## 2.4 カラス（烏）

当地では首から胸が灰色でやや小型のイエガラスが多い。真っ黒いカラスもある。ハシブトガラスのようだが、日本のより小型である。瞬膜を閉じると目付きが悪いところ、すぐにトビや他の鳥にちょっかいを出すのも日本のカラスと一緒にいる。



写真7 イエガラス



写真8 インドアカガシラサギ（右）にちょっかいを出すイエガラス（左上）

## 2.5 ツチイロヤブチメドリ (土色藪知目鳥)

日本では帰化鳥で増えているガビチョウの仲間である。群れで暮らしギャーギャーとやたら騒々しい傍若無人な鳥。人をあまり恐れない。ピョンピョン歩きは妙に軽薄な感じがする。それでいて怖い眼をしている。他の鳥を蹴散らしてしまうので好きになれない。



写真9 群れで騒ぐツチイロヤブチメドリ

## 2.6 インドアカガシラサギ (印度赤頭鷺)

サギ類は日本にもいる種類が多く数も多いが、日本にいないのはインドアカガシラサギだ。地上にいるときは地面と区別のつかない地味な格好だが、飛んでいるときは白い羽が目立つ。



写真10 滑空するインドアカガシラサギ

## 2.7 ベニスズメ (紅雀)

バドダラの水瓶Ajwa Lakeは、街の東25kmにある大きな溜池で、市街を流れるワニの棲むVishwamitri川の水源である。この湖にもワニがいるそうだ。湖の南側はガマやスイレンなどが茂る湿地帯でいかにも出てきそうだ。おっかなびっくり水路沿いの土手に入ってみた。ハタオリドリやヒタキの仲間の群れが草むらるを飛び立っていく。サギ類もあちこちで獲物を狙っている。遠くにセイケイも見える。その向こうでは小さな筏に乗った人が何かを採っているようだ。

水路際の草に深紅に白斑がある鳥を見つけた。初

見である。上品でお洒落、美しい。オスの繁殖羽だのようだ。近くメスは茶色が入った灰緑色で羽根の一部が赤い。こちら品が良い。帰ってすぐ、図鑑を調べると「ベニスズメ」であった。日本の小鳥屋で売っている鳥？知らなかった。そんな名前の松任谷由実のアルバムもあったような。

この鳥はインドが原産地のひとつで、日本では江戸時代から飼い鳥として輸入されていたという。英名Red Avadavat, 学名Amandavaはこの鳥の出荷地だったアーメダバードが由来だそうである。バドダラの北西約100km, グジャラート州最大の都市である。所縁の地で初見できたのは嬉しい。18世紀、日本まで6,000km以上の道のりをこの鳥はどうやって来たのだろうか。海路だろうか、駱駝の背に乗って陸路を来たのだろうか。途中、代替わりしたかもしれない。今日見たベニスズメともDNAが繋がっているはずだ。



写真11 羽を休めるベニスズメ

## 2.8 ヤツガシラ (八頭、戴勝)

ヤツガシラは稀に日本でも見られる鳥で、出ると新聞記事になる。きれいな薄茶色の体に黑白縞の羽根と下半身、長い嘴に冠羽が目立つ。時折、冠羽を扇状に立てるのが名前の言われだ。

昭和天皇は皇居内の畑で芋掘りをしている時に見つけて、侍従に双眼鏡を持って来るよう命じたという。事情の分からない侍従は「芋を掘るのに何故双眼鏡がいるのですか」と聞き返したという逸話がある。さすが生物学者の昭和天皇である。掘っていた芋もヤツガシラだったかどうかは知らない。皇室がらみでは、正倉院御物の琵琶にこの鳥の象嵌が入ったものもある。

インド全域が生息地なので、見られるのを楽しみにしていた。こちらはバドダラの南東約40km, KCPLの東20kmほど、農業用の大きな溜池Vadhavana Lake付近で見ることが出来た。ここは私のお気に入りの場所で、冬になると夥しい数のガ

ンやカモ類が渡ってくる。

池の土手の斜面の草地で長い嘴を突き立てて虫を探していた。警戒心はそれほど強くないが肝心の冠羽はなかなか払ってもらえない。着地した一瞬払げるのだけれど撮影は難しい。



写真12 土中の虫を探すヤツガシラ

## 2.9 インドブッポウソウ (印度仏法僧)

この鳥もVadhavana Lake周辺の畑で見掛けた鳥である。鮮やかな青い翼、薄茶色の首の羽毛の下に透ける紫色、一度見たらファンになってしまうこと請け合いの美しさである。気に入った枝に留まって地面を見張り、虫を見つけては飛んでいく。警戒心は薄くて眼の前に舞い降りて、近過ぎてレンズの焦点が合わないこともしばしばだった。この鳥とヤツガシラ見たさに何度通ったことだろう。



写真13 滑空するインドブッポウソウ

## 2.10 ドバト / カワラバト (土鳩 / 河原鳩)

バドダラの街で必ず見かける。上野公園のハトと同じである。家々の屋根や手摺、電線に群れている。通りでは、屋台で買った豆を撒いている人がいて群がっている。傍ら、屋台の豆を直接狙う不屈鳥もいる。部屋の窓を開けていると入って来て空調の室内機の上に居座るし、天井扇風機の羽根に留まったこともあった。追払うと数m先の隣家の屋根まで飛

んでいく。人を見透かしたようで腹立たしい。上空にトビが来るとバラバラと飛び立って迎りを一周する。スカベンジャーといえトビは猛禽、一応は逃げで行こうかという感じだ。



写真14 豆屋の屋台に留まるドバト

## 2.11 カノコバト (鹿の子鳩)

日本のキジバトに相当するのがカノコバト、ワライバトである。キジバトの首の白黒の縞を鹿の子模様にしたのがカノコバト、小ぶりにして茶色を強くした感じがワライバトである。ドバトと違って凶々しく部屋に入っては来ないし、柔らかい色の姿も声も優しい。



写真15 ナンバンサイカチで休むカノコバト

## 2.12 オニカッコウ (鬼郭公)

オスは体が真っ黒で大きさはカッコウと同じくらい。嘴が灰白色、赤い眼をしている。メスは全身鹿の子柄である。いろいろな声で鳴くが、明け方「プアオー・プアオー」と陰気な声で鳴かれると気持ちが悪くなってしまふと家人は嫌っている。名前のとおりカッコウの仲間で托卵する。隣家のアショクの木でカノコバトが卵を温めていた時、親鳥がちょっと巣から離れた隙にメスのオニカッコウが飛び込んで行った。数十秒後、卵を啜って飛び去った。さっと産卵して数合わせにハトの卵を持ち去ったようだ。



写真16 大きな種子を吐き出すオニカッコウ

2.13 クロトキ, アカアシトキ, ブロンズトキ (黒鶺鴒, 赤足鶺鴒, ブロンズ鶺鴒)

トキというとニッポニア・ニッポン。佐渡で野生絶滅して中国産個体を人工繁殖, 今年自然繁殖も確認されている。日本では19世紀まではどこにでもいる鳥だったそうだが, 当地のその仲間は現在も良く見られる鳥だ。



写真17 クロトキ (左) とアカアシトキ (中央・右)



写真18 ブロンズトキの群れ

体が白くて頭が黒いのがクロトキ: Black headed Ibis, 体が黒くて後頭部が紅色, 足が赤っぽいのがアカアシトキ: Red-naped Ibis, 体全体が黒っぽい茶色で金属光沢があるのがブロンズトキ: Glossy Ibisである。分かり易い英名と比べ和名は勘違いし

やすい。

ブロンズトキは冬の田畑で群れを作って採餌しているのを見掛けることが多い。一斉に飛び立つ様は壮観である。

2.14 フラミンゴ

アフリカや熱帯の鳥のイメージだが, 西インドでも生息している。オオフラミンゴはアーメダバードの西方20kmほどのThol Lake野鳥保護区で見ることができた。薄紅色が美しい。長時間頭を水面に浸けっぱなしで採餌して, 頭に血が溜まりそうだがどうなのだろう?



写真19 オオフラミンゴとアカツクシガモ

2.15 アネハヅル (姉羽鶴)

当地では留鳥のオオヅル, 渡り鳥のクロヅル, アネハヅルが見られた。

3月中旬バドダラの北西100kmほどにあるラムサール条約指定地Nalsalovar Lake近くでアネハヅル数百羽の大群が一斉に飛び立ち, 上昇気流を捉え螺旋状に昇って行った。数分後, 複雑なV字編隊を組みながら北に向かった。これからヒマラヤを越えてチベット, モンゴルに向かう。何とも壮大で胸が一杯になる眺めだ。



写真20 螺旋状に上昇するアネハヅル

## 2.16 クジャク (孔雀)

インドの国鳥はインドクジャクである。日本では動物園や公園で飼育されているのを見るが、当地では田畑や公園、ゴルフ場の芝生などよく見掛ける。市内サヤジバウグ公園内の動物園では、檻の中では飼い鳥が、外の草むらでは野生が歩いている。あの美しいオスの尾羽（上尾筒）は重そうユサユサ歩く。木の上で休んでいるときも多い。

繁殖期が終わると尾羽は生え変わるの、一時、尾羽が無くてサマにならない格好をしている。抜け落ちた羽根を集めるのか、街中で羽根を束にした物売りをよく見掛ける。



写真21 羽根を上げたインドクジャク

## 3. おわりに

御多分に洩れず海外駐在の悲喜こもごも苦労話には事欠かないが、2016年5月4日帰任、3年間の駐在生活に別れを告げた。年間休日58日、日曜日と数日の祝日、朝夕のわずかな時が観察時間なのが残念だったけれど、駐在生活の良いアクセントだった。

## 著者



石川 照之

1982年入社。経理本部経理部専任部長、KYB岐阜地区経理部門。PT.KYBI、熊谷工場、KCPL駐在等を経て現職。

今回、あらためて感じたのはインターネットの普及でいとも簡単に情報がザクザク得られることだ。英名・和名対比もすぐだ。10年前とは隔世の感がする。ただし、孫引きひ孫引きで元ネタが皆同じだったり、明らかな誤りも多い。利用者の眼力が求められる。写真を紹介しながら矛盾しているが「百聞は一見に如かず」のとおり、自分の眼で実際に見た感動とは比べようもない。ぜひ一見をお勧めしたい。

鳥名等の記載は十分注意したつもりだが、誤謬、勘違い等あるやもしれない。ご指摘を期待したい。

## 参考文献

- 1) Birds of the Indian Subcontinent Second edition : Richard Grimmett, Carol Inskipp and Tim Inskipp, Oxford Univ. Press
- 2) Birds of the Indian Sub-continent : Martin W Woodcock, Harper Collins Publishers
- 3) A Naturalist's Guide to the BIRDS OF INDIA : Bikram Grewal and Garima Bhatia, Prakash Books
- 4) 叶内拓哉他 山溪ハンディ図鑑7 日本の野鳥 山と溪谷社
- 5) 独立行政法人 農畜産業振興機構 月報「畜産の情報」海外編 <http://www.alic.go.jp/>  
特別レポート「インドにおける家畜・食肉流通の概要～牛と水牛を主体に～」2007  
特別レポート「巨大な可能性を秘めたインドの酪農」2006
- 7) 株式会社 フードペプタイド ホームページ <http://topics.foodpeptide.com/>
- 8) Wikipedia, インターネット検索各項目
- 9) Google Map